Y4-19

看護師確保への取り組み（第3報）～専門・認定看護師会の協力を得て～

山田赤十字病院　研修センター[1)]、
山田赤十字病院　看護部[2)]
○小林美香子（こばやし みかこ）[1)]、松尾　吉津[2)]、石谷　　操[1)]、
宮門　郁代[1)]、谷　　眞澄[2)]、松井　和世[2)]

【はじめに】当院では平成18年度から看護師確保対策の一環として、国家試験対策支援を実施してきた。これまでは研修センターが担当する学習会の開催、通信の発行であった。平成21年12月からはこれに加え、当院の専門・認定看護師会の協力を得た国試対策セミナー（以下、セミナー）を企画・実施したので報告する。
【方法】1.セミナーは単独あるいは当院で行う就職説明会に併設して開催。2.全学年の看護学生を対象。3.1回のセミナーにつき2～3名の専門・認定看護師が講師を担当。4.それぞれの専門領域別に看護師国家試験の過去問数題を60分間かけて解説。5.途中20分間、看護学生と専門・認定看護師、研修センター職員とのティータイムを設定。
【結果】1.平成21年12月から翌年にかけ5回のセミナーを開催し、1回のセミナーに2～12名、のべ33名の看護学生が参加した。2.講師はがん看護専門看護師1名、7認定看護分野（緩和ケア・がん化学療法看護・集中ケア・感染管理・手術看護・糖尿病看護・がん性疼痛）から10名の認定看護師が担当した。3.セミナー受講直後の感想として「国試のポイントだけでなく、その分野における看護で何が大切なのかを学べた」「臨床での知識が必要となる問題の解説は現場で働いているナースに教えてもらうと分かりやすい」などがあった。
【考察】専門・認定看護師会の協力を得たセミナーの初回開催から1年半が経過し、運営も軌道に乗り始めた。自院で働く専門・認定看護師の臨床に根ざした解説は受講者から好評であり、当院の看護を伝える機会にもなっている。しかし、受講申込者の少ないことが最大の課題である。今後は、看護師確保の成果として表れるよう、開催時期や広報活動の検討を重ねていきたい。

Y5-01

東日本大震災後の避難者を対象とした下肢深部静脈血栓症の啓蒙と調査活動

長浜赤十字病院　災害救護班
○高橋健志郎（たかはし けんしろう）、中村　誠昌、高野　洋子、
安居　和美、佐治　雅史、葛城　利明、
天野　　隆

【背景】地震大国である日本では、地震後の健康障害は医療関係者の関心事の一つである。新潟県中越地震後に車中泊をしていた避難生活者に肺塞栓症（PE）による死亡者が発生し、震災後のケアの必要性が注意喚起された。東日本大震災では、長引く避難生活の影響下でPEの危険性が危惧される。
【目的】1.　東日本大震災後の避難生活者に、下肢深部静脈血栓症（DVT）とPEの啓蒙活動をする。2.DVTの危険因子保持者を抽出し、DVTの精査をする。3.　調査地域のDVTの危険性を明らかにし今後の活動の指針とする。
【方法】平成23年4月3日から4月6日までの3日間福島県会津若松地域の東日本大震災による避難所を訪問し、DVTとPEの啓蒙活動を行った。アンケートによるスクリーニングを行い、危険因子保持者に対し血中Dダイマー測定・下肢静脈エコー検査を行った。
【結果】パンフレット・ポスターによる啓蒙活動を行った。危険因子保持者に生活指導を行った。訪問施設の避難者1263人中アンケートを108名に行った。ADL低下者53％、車中泊者17％、下肢症状をもつ者19％であった。既往症も考慮して、DVTの危険因子保持者を選び、33人に血中Dダイマーの測定をし、31人に下肢静脈エコーを行った。血中Dダイマー値は1名が高値であった。下肢静脈エコー検査では全員にDVTを認めなかった。
【考察】会津若松地区に避難されている方のDVT発症のリスクは低いと推定される。この地域は放射能汚染からの避難者が多く、震災後の環境に身体的余裕があったことが要因の一つであろう。
【結論】東日本大震災による福島県会津若松地域の避難者から、アンケートによりDVT危険因子保持者を抽出し、血液検査・下肢静脈エコーをしたところ、DVT罹患者はなかった。